

五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ

— 型式変遷における一視点 —

寺内 隆夫

I 土器装飾の分析	(2) 勝坂式土器の装飾構造
1 土器研究の流れ	(3) 小結
2 視点と対象	2 装飾構造の変化にともなう個別装飾の変化
(1) 実用的機能と非実用的機能	(1) 玉抱三叉文の変化—主装飾の場合
(2) 運用・統辞・意味	(2) 連続「コ」の字文の変化—補助装飾の場合
(3) 五領ヶ台式土器から勝坂式土器への転換期を狙う	(3) 人面装飾と人体装飾—具象文の変化
3 統辞部門の分析にあたって	(4) 小結
(1) 土器装飾としての制約	III まとめ
(2) 土器装飾の構成	1 まとめ
II 五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ	2 展望
1 装飾構造の変化	3 おわりに
(1) 五領ヶ台式土器の装飾構造	

I 土器装飾の分析

1 土器研究の流れ

19世紀に入り、西洋から導入された学問が興隆する時期、縄文土器の研究があらためて祖上にのぼると、歴史学・人類学の学問体系の中でどのような位置づけを与えるべきか、といった分類と帰属が問題になった。当時の世相を反映し、まずはじめに、その土器を使用した民族が究明されるべき重要課題となり、厳密な時間的な位置づけはそれに附随する問題とされる傾向にあった。そこには、最終的には大和民族によって席捲される土器文化・民族というストーリーが前提として見え隠れしていた。

その後、考古学の発達にともなって、縄文土器の位置づけが先入観念や恣意的な解釈を離れて「真に執るべき科学的」(山内 1937)な方法によって解明される方向が示された。20世紀前半に入ると、縄文土器の時間的・空間的体系の確立に多くの才能が投入されていった。その前提は、「文化の変遷は進行中の状態で観察することは出来ない」(山内 1937)という言葉に示されるように、年代差・地方差をより細かく分類し、モザイク状に組

み上げた(系統関係を把握した上での)縄文土器の体系を作ることにあった。個々の土器の内容を知ることとは、それに対比される土器との差異を明確にすることであり、よって、対比される枠組みはできるだけ細かい方が土器文化の動きを鮮明に描けるのである。

こうした研究動向にそって、各地域で多くの型式(枠組み)が設定され、他の型式との差異が述べられていった。しかし、隣接する型式と型式の差異を一刀両断に示すことは土器装飾の性質上無理があり、見解の相違を生み議論が泥沼化することもしばしばあった。これは、枠組み(型式)の設定自体の持つ固定的な属性が、土器文化の複雑な動きに対処しきれないためであった。

一定の小地域の短かい時期に存在する土器群には、我々の設定した典型的な型式のほかに、搬入されたもの、他型式の装飾要素の一部を取り入れたものなど、多種多様な土器が存在している。こうした事実が、型式設定における矛盾の中から再度脚光を浴びることになっていった。1970年代頃から主流となる研究(もちろん土器研究の初期から論じられてはいたが)は、土器そのものとその背後に存

在する人間社会の運動状態の解明に向った。静態的な枠組みの設定から、その枠組みを越えた運動状態を鮮明に描くことに目標が変化したのである。しかし、ことわっておかなくてはならないのは、このことによって枠組みを設定する努力が放棄されたのではなく、より細部にわたる分類と系統の把握が必要条件となっていたのである。土器に対する視点の向け方が変わったとしても、枠組みの設定をより細かく究極まで進めることで文化の動きを鮮明に描く、という方針は生きているのである。

土器の細分が進む一方で「細別型式の年代的連続がよく認められ、自然に大別をなすべき区切りを発見し得ない状態である。」(山内 1937)といわせた縄文土器をいくつかの群にまとめる研究もなされてきた。岡本勇氏はその一連の論文(岡本 1965・1966・1968・1969・1975)によって、山内氏の提唱した5期区分を克服する端緒として、型式群の設定を行なった。しかし、氏の主張は細別型式の総合化を生産力の発展に即して行なおうとした点で多少問題が残る(堀越 1971)。土器装飾に示された象徴的な文化の体系と生産の体系とはたがいに干渉する部分はあるものの、一致するとは限らないからである。

また、小林達雄氏は「様式」の概念を用いて「型式群」を説明しようと試みた(小林 1966・1977)。しかし、氏のいう「共通の気風」を分析する方法は具体的に示されず、抽象的な一般論の段階にとどまっていた。

その後小林氏は火炎土器を対象にしてその分析方法の一端を発表している(小林 1981)が、1977年には谷井彪氏により、勝坂式を対象として「型式群」、「様式」を具体的に捉える方法がうちだされた。その「勝坂式土器の文様構造について」(谷井 1977)と題する論文は、新しい角度からそれまでの型式研究の不備を指摘し、抽象的な説明しかされなかった「様式」を「実体レベル」で把握する方法を具体的に示した。土器装飾にはその製作・使用する集団の分類・論理体系が表出されているという前提にたち、勝坂式土器の基本構造と各レベルにおける交換体系をとりあげた内容は、個別の結論では煮つまっていない面も認められるものの、その新鮮な切込み方については評価される

べきものであろう。本稿の出発点においても谷井氏の論文に触発された部分が多いことをことわっておきたい。

土器装飾を盛んにおこなった縄文文化は、新たな装飾方法を開発し装飾を絶えず変化させていった。めまぐるしいほどの「あたりしき」への欲求は、土器製作を盛行させ、さらに土器を中心とした文化を活性化していったのであろう。細部におよぶ土器装飾の動きを明らかにしていくことは、その文化の活性化や沈滞化を担った人々の動きを捉える上で重要な意味を持つものである。しかし、まったく開放しっぱなしで土器装飾が変化していくわけではない。そこには特定の「まとまり」ができるのである。それは、情報の伝達が行きとどかないとか、材料の入手に差がある、といった問題の以前に、分類・論理体系がなくては人間社会が成立しないという点にかかわってくる。自己あるいは自己の所属する集団の確認は、他との差異によって知ることができるのであり、自己の認識できる世界を分類し、体系付けることによって可能となるのである。おのずと、土器装飾には伝統や規範という形で、時期によっては強い意志によって、またある時期にはほとんど無意識に近い状態でこうした力がおよぶと考えられる。よって特定の時期・地域には他と異なる「まとまり」が存在することになる。そしてそれは、その集団の分類・論理体系にかかわる以上、短期間で極端に変わってしまうことがなく、我々が「型式群」として捉えるものに相当する時間の長さを有していたと考えられる。これまでの研究はこの「まとまり」を具体的な分析によって示すことが皆無に等しかったが、谷井氏の研究指針を発展させること、さらに記号論の導入などによって可能となる部分も増えると考えられる(鈴木 1983、中島 1985)。

土器研究の現状は、土器装飾そのものの、そしてその背後に存在する人間の運動状態と、めまぐるしく揺れ動きながらも一定の時間と空間内に認められる「まとまり」の両者を具体的に分析し得る段階に入ってきたといえよう。活性化の方向と規範化の方向は絶えず反発し、一方に傾斜することがあったとしても、土器装飾およびそこから垣間見る文化は、両者の均衡によって成り立っていることには違いない。そのため、今までのように

一方に偏った研究から、両者を総合した研究がなされなければならない。そしてその上で、土器装飾のもつ豊富な内容の分析を改めて行ってみるべきであろう。本稿においても、そのあたりを射程に含めていくつかの試みを提示していきたい。

2 視点と対象

前節で述べたことをそのまま実行するにはひじょうに大がかりな分析が必要であるため、本稿ではあらかじめ視点と対象をしぼっていききたい。

(1) 実用的機能と非実用的機能

土器が装飾だけの美術品として生まれたものではなく、容器である点を忘れるわけにはいかない。たとえば、同一系統の土器において器種の構成に大きな変化が認められる。あるいは、特定の主要な形態に大きな変化が生じる、といった点を重視していくつかの型式を群にまとめたり、分離したりすることも可能である。これは実用的機能を優先して考えた場合であり、その指示することは、食生活を巡る文化の差や、生産基盤の差であろう(註1)。

一方、縄文時代にあつては、装飾に土器製作中のエネルギーの大半が注ぎこまれたと考えられる。しかし、その差はいちがいに生産基盤に一致するとは限らない。装飾の過剰となってくる中期を見ても、相模湾岸(五領ヶ台貝塚など)から島礁部(大石山遺跡など)と中部山岳地域には共通性の高い勝坂式土器が主体的に分布しており、房総半島から三国峠付近(新巻遺跡など)には阿玉台式土器が広がっているのである。山間部の集落の住民と貝塚を形成する集落の住民が同様の生活基盤の上に立っているとは考え難く、よってこの事実、ある集団が生産基盤の共通性(短絡的に海と山に分けて考えることはできないが大局的には許されるであろう)を離れて、同一の価値観(分類・論理体系)を保持していたことを示している。ここに非実用的機能である装飾に注意を払い、装飾の内容によって型式を群にまとめることが重要な意味をもってくる。

さらに、実用的機能と非実用的機能の表現は同時に変化したり、同じ分布範囲を示しているとは限らないのである。そのズレは、時間軸にそって考えてみると、生産基盤ののびのびとした社会状況の

変化の「徴候」ととれる装飾の変化やまた、一方では社会からの必要性に従属する形で社会の変化に遅れて現われ、長い期間保持される装飾によって生ずる。このことを的確に捉えることができたならば、こうしたズレの存在から装飾の意味を探ることが可能になり、また社会の変化を土器装飾という社会の細部から読みとることも可能になろう。この点に関しては最終章で若干触れてみたい。

(2) 運用・統辞・意味

非実用的機能を重視して型式群としての「まとまり」と土器細部の「動き」とを検討していくのであるが、土器に見られる非実用的機能は、時代によってその強弱が激しい。これは、装飾にどれだけの意味を盛り込めるか、という縄文人の精神の発達自体に差があること。また、宗教的遺物の発達段階や、祭祀の体系の変化などにより土器装飾の意味が相対的に異なっていることがあげられる(註2)。そのため、縄文時代の全般を同一に見ることは難しい。よって今回は具象文(即物的に強い意味をもっていることがわかる)が多くなり「物語性文様」(小林 1979)と呼ばれたりもし、実用的機能までも束縛するような大把手や隆線装飾の発達する中期前半に視点を据えていきたい。

土器の非実用的機能の分析にあたっては、先ほどあげた運用面のほか、統辞部門・意味部門といった土器装飾を直接分析する方法が考えられる。

運用部門は、縄文時代における美術や信仰の体系の中での土器装飾の使われ方が問題となる。そのため広範囲の事物を分析する必要があり、土器そのものの分析を逸脱するため、ここでは除外しておく。

土器装飾にあらわれた意味を解説する研究は、古くから蛇体文の分析などを通じておこなわれてきた(江上 1963など)。近年では武藤雄六氏らを中心にしたグループにより積極的な意見が提出されている(武藤 1975、1978a・b)。しかし、中世ヨーロッパの絵画分析や民族芸術の分析と異なり、装飾の意味を裏づける資料や伝承が皆無であるため、ややもすると、自分の思い込みに沿った形に読み変えられてしまう危険性を捨てきれない。このことから、土器から直接意味を解説する研究はいっ

たん保留しておいて、周辺を固めることを優先すべきであろう。

一方、特定の意味や価値観は土器装飾に変換されて表現されるため、特定の意味は特定の装飾方法に一致することになる。このことから、キャンバスである器面がどのように分割されているのか、主となる個別装飾はどの位置に配置されるのか、主装飾と他の装飾はどのようなルールによって組織され、全体を形づくっているのか、などという統辞法を詳しく分析していくことで、土器装飾に隠された意味や価値観に迫ることが可能になるのである。本来統辞部門と意味部門は併行して分析されるのが最良であるが、意味部門を保留せざるを得ない現状では、統辞部門において隣接する時期と地域の土器を比較しその差異を明確にすることで、特定集団の独自性を探っていくことにせざるを得ない。その独自性こそその集団に共通の価値観や論理体系を象徴的に現わしたもののといえよう。

本稿ではこうした前提に立って統辞部門に焦点を当てて行くものである。

(3) 五領ヶ台式土器から勝坂式土器への転換期を狙う

前項でも指摘したとおり意味部門に手を付けずに、統辞部門を分析するには、時間的・空間的に隣接する型式との差異を明らかにしていくことが重要である。今回は紙数の関係上、空間的に隣接する型式との関係は除き、同一系統の土器が時間的に変遷する中で、特に画期となる時間幅を選ぶこととした。

一つの土器装飾の構造が画期を向かえる要因には、他地域からの圧倒的な力により席捲されてしまう場合がまず考えられる。しかし、土器製作技術や装飾効果のいずれもが系統関係を追える場合、その転換は何を意味しているのだろうか。

絶えず変化しながらも全体構造がある程度保たれているのは、その背後に集団の価値観や分類・論理体系が関与している点を再三述べてきたが、現実にはそれを支えているのは、1つには、意識・無意識を問わずに土器製作者にかかる伝統である。そしてさらに直接的には土器製作時における上の世代からの製作技術に関する伝承であり、下の世代の学習にある。

そのため、土器装飾構造が転換を迎えるのは、土器製作を行う新しい世代が、それまでの価値観に不信感を抱きはじめた時点で芽ばえるといえよう。個人の製作意欲は各構成要素のレベルに「新しさ」を加えることで解消可能な場合が多い。しかし、背後に大きな社会変動があった場合、集団の価値観なども変化を余儀なくされ、それは土器製作そのものの位置付けの変化とともに、そこに表現される装飾構造の転換にもつながるのである。

こうした仮定を念頭におき、五領ヶ台式土器から勝坂式土器(以下特定の場合以外「土器」は省略する)への転換期に焦点をしばるのであるが、五領ヶ台式と勝坂式をどこで分けるかについては諸説があり統一されていない。勝坂式の設定直後にはすでに、山内氏(山内 1940)と甲野・八幡両氏(甲野 1935、八幡 1938)との扱え方は異なっており、その後貉沢式の所在が問題となることで、さらに、意見の分れることになった(藤森 1965、武藤 1978)。勝坂式の成立に問題をしばると、1 山内氏説の踏襲一勝坂Ⅲ(藤内)式から(佐藤 1974、今村 1986)。2 甲野氏説を踏襲一勝坂Ⅱ(新道)式から(戸田 1971)。3 勝坂Ⅰ(貉沢)式から(谷井 1977、鈴木 1983、下総考古学研究会 1986)。などがある。

貉沢式については井戸尻編年の設定当初から位置付けが問題となっていた。五領ヶ台式と勝坂式の間にいる阿玉台式の影響を受けた土器との見方もあったが(戸田 1971)、詳細にわたる分析の結果、阿玉台式の影響はさほどなく、西関東・中部高地の五領ヶ台式から直接継承した部分がほとんどであることが判明している(中西 1979、寺内 1984)。さらにその内容からも、この段階を勝坂式から分離する理由は薄いと考えられる(寺内 1984 ほか)。よって、ここでは、筆者も参加した下総考古学研究会の共同研究の成果を踏襲し、井戸尻編年という貉沢式を勝坂Ⅰ式として考えていく。さらに本論の中でこの段階から勝坂式とした根拠を補足していくこととする。

3 統辞部門の分析にあたって

(1) 土器装飾としての制約

各種の装飾はデタラメに付されるのではなく、その時期特有の統辞法によって組み立てられ、一個の意味を形成している。しかし、土器の製作者

たちが満足のゆく表現をしようと試みたとしても、キャンパスが土器である以上、素材からくる制約がどうしてもつきまとうことになる。

第1には、粘土でつくられた焼物であることによって、装飾の方法が限定されてしまう点である。特に施文具と施文手法の限定については、型式研究の基本として盛んに論じられてきたところである。技法としては貼り付けるか、塗り付けるか、あるいは何らかの工具を動かしてその痕跡を残すか、のいずれかに限定される、と言ってよく。そのため、表現されるモチーフもおおのずから限定されていくのである。縄文時代の早期には施文具、施文手法のほとんどが出そろってしまい、勝負はその内の何を主に使うか(縄文のパラティエーで勝負するのか竹管状工具と粘土紐の貼付けで勝負するのか)と、各々の個別装飾をどのように配置して一つの土器の装飾としてまとめあげるか、にかかってくるのである。

第2には実用的機能からくる制約である。縄文土器の基本が煮沸に使用する深鉢形土器にあることは承認済みのことと思われる。この深鉢について考えるならば、火にかけることから使えない装飾もあろうが、それとともに、その機能から口頸部の膨らむ円筒形が主流を占めることに着目しなければならない。まず、容器であるため内面への装飾は敬遠され、視線を集めやすいことから外表面を対象とする場合がほとんどになる。そして、その外表面に施された装飾が、その口頸部の膨らむ器形から上下に2分割されることを余儀なくされている点に注目すべきであろう。この2分割は、縄文時代の多くの時期の装飾を規定する要因の一つとなっている。

第3に口頸部のふくらむ器形は無意識に口頸部への視線集中の傾向を生み(上野 1981)、口頸部主流の装飾構造の成立をうながしているといえよう。

第4に円筒形という制約から、外表面に描かれた装飾は必然的に一度に全装飾内容を見ることができない。このことは、同一装飾の機械的な繰替しによってどこから見ても同じ効果を表現する場合と、中期の土器に代表されるように、「物語性文様」の展開となる場合を生みだしている。この場合は把手などを中心として分割された一つ一つ

の面(単位)が、一度に目に入る「場面」として完成されている。その面と同一構成の装飾が単位毎に若干の差をもちながら展開されるのは、土器を回転させて見る行為の時間的経過と、土器表面に描かれた場面の時間的経過を一致させて示している、とも考えられよう。また異なった装飾との組み合わせとなる場合には、空間の移動を示していることもあろう。後者の場合であっても、一つの土器の一連の装飾内における空間(場面)の移動であるため、それは時間の移動に近い意味をもつといえよう。

以上の如く縄文時代の深鉢形土器はその用途に即した形から、上下に長いキャンパスが二分され、しかも視線が口頸部に向きやすい傾向にあることを指摘した。このことは口頸部文様帯と胴部文様帯で空間を二分し、さらにキャンパス上での上下関係、装飾量の多少がそこに付加され、装飾内容の主従となってしまうことがありうることを示している。また、円筒形である土器の装飾は一度に確認できる空間(単位)が横方向へ時間的に展開しやすい点を認めなければならない。

このように、土器装飾は土器の実用的機能に即した形からの制約を受け、表現が限定されてしまったり、知らず知らずのうちに分割・展開方法をその形から受け入れてしまったりしている。よって、土器装飾の分析においては、装飾の方法が直接その製作者たちの表現したい世界に一致するとは限らない、という点をまず確認しておかなくては大きな誤りを犯す場合がでてこよう。これは、強い意味付けをされた装飾要素と、単に機械的に器面を埋めていく装飾要素との見極めにも通じるところである。しかし、こうした制約を実に巧みに利用し制約を制約と感じさせない表現が発達していることも事実である。

(2) 土器装飾の構成方法

一つの土器装飾全体は構造をもち、それは部分の集合から成り立っているが、それぞれの部分を全体の構造に見合った形に組織立てて統合して行く方法が統辞法である。そして個々の部分は各レベルにおける構成要素となる。ここでは次章の具体的分析へ入る前に各レベルの構成要素の説明を行っておくこととする。

構成要素の最小単位を装飾要素と呼ぶ。これは、竹管状工具による刺突の一つ一つの凹み、沈線の一本一本などをさす。これ自体では意味を形成できないものが多く、いくつかの装飾要素が集合して、意味を有すると考えられる個別装飾が成立する。ここで文様に限定せず装飾とした理由は、文様とした場合、製作技法にもかかわる輪積痕の意識的な残存やヘラ状工具による磨き、あるいは屈折底などの部分器形などを包括できないためである。しかし文章中で、文様だけにかかわる記述の場合は文様要素という言い方も使用する。

個別装飾とは、たとえば、三叉状の陰刻と円形の刺突が組み合わさってつくられる玉抱三叉文などで、土器装飾の単語とも呼べるものである。各々意味が付加されていると推定されるが、その配置、他の個別装飾との連結方法によって形成される脈絡の中で意味にも変化が生じると考えられる。

さらに、勝坂Ⅱ式の区画文と耳状突起の関係のように、個別装飾同志が必ず連結して慣用的に複合する場合があります、より上位の構成要素となっている。

個別装飾には、山形口縁の三角状空間といった視線の集中する箇所にくるものと、その周囲に配置されるもの、といったように主装飾と補助装飾の関係が約束事として存在する。こうした関係によって連結された個別装飾の集合は、より上位のレベルである文様帯(装飾帯)と単位装飾にかかわってくる。

文様帯は土器装飾全体の空間の基本的な分割にかかわっており、各文様帯は各々の領域において構造化した意味をもつと推定される。また単位装飾は把手などを基本として一度に見ることの可能な「場面」であり、他の場面との関係によって、時間的に限定された意味をもつものと推定される。

こうした各文様帯と単位装飾を統合して一つの土器装飾全体が成立しているのである。そこには、分割に関わる装飾要素や、各領域間や場面場面を繋ぐ装飾要素・個別装飾などが存在している。

部分が統合され、全体を形成しているのであるが、この統辞法は全面的に規制されているわけではなく、土器製作の活性化をうながすために、あるいは雑情報の混入などによって、絶えず新しい構成要素を各レベルで取り入れている。しかし谷

井氏も指摘するようにどのレベルの構成要素であっても、その型式の構造を否定してしまうこともあり得るし、逆にほとんどが異なっている場合でも、構造としてはその型式であると容認される場合があったと考えられる。

Ⅱ 五領ケ台式土器から勝坂式土器へ

1 装飾構造の変化

ここでは、土器装飾における「筋書」とも呼べる基本的な分割と割り付け、及び主装飾の配置について見ていく。特に一度に見ることが可能な「場面」における上・下領域の統辞法に視点を定めていく。単位装飾の横方向への展開については安孫子氏や谷井氏の分析(安孫子 1969、谷井1979)があり、さらに近々、展開写真を軸にした研究が刊行されるやに聞いている。筆者自身展開図を多く見ていないため、この点に関しては保留しておきたい。

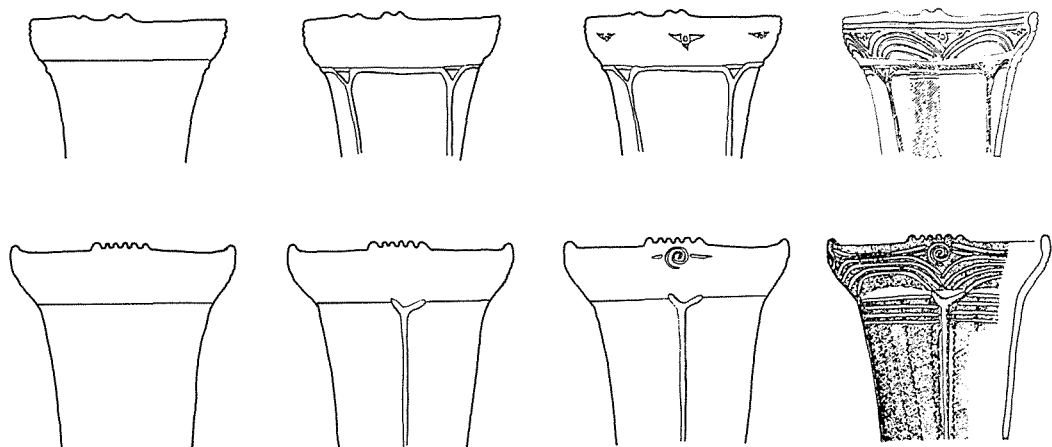
(1) 五領ケ台式土器の装飾構造(註3)

さて、第1図にあげた五領ケ台Ⅱ式(後)(註4)の例から、五領ケ台式の装飾構造と統辞法を考えていこう。まず1・2ともに特定の装飾が若干のちがいをもちながらも、横方向に繰返されていることがわかるが、この点に関しては確認だけにとどめておく。

さてこの二個体の土器装飾を構成している個別装飾・装飾要素を摘出しておこう。1、器形—キャリパー・2、突起・3、隆線—Y字状懸垂、横位隆帯。4、沈線—渦巻・弧状・横位。5、刺突—円形・刻み状。6、縄文。などである。

では、これらがどのような役割を担っているのかを見ていく。装飾構造の基本は第一に空間の分割にある。これは、器形と横位隆線(横位沈線)によって上下に二分され、上の領域は口頸部文様帯、下が胴部文様帯である。

下の領域で最も強調されるのは隆線による上下方向の懸垂文であり、それは上の領域を支える、あるいは上の領域へ上昇・下降の効果をねらっていると思われる。この上下方向の効果は五領ケ台Ⅰ式に結節縄文が横位から縦位に変化した段階にはじまると見てよく(第3図1)その後五領ケ台Ⅱ式には沈線や隆線の個別装飾によって強調され、



第1図 五領ヶ台Ⅱ式の基本構造

その位置付けが確立された。ほかには顕著な装飾がなく、上下の分帯をやわらげる横位沈線がある程度となっている。五領ヶ台Ⅱ式の前半には胴部装飾の密集する例も認められるが、その場合でも胴部装飾が乱雑にならないように統辞しているのは上下方向の懸垂文である場合がほとんどである(第3図2)。

これに対して上の領域の強調部分は、陰刻による玉抱三叉文・渦巻沈線と突起のセットである。この装飾は上の領域だけでなく、この土器装飾の主要モチーフでもある。五領ヶ台Ⅱ式の統辞法の基本は、空間の2分、主文様を口頸部に配し、その強調をおぎなう胴部の簡略化と懸垂文の存在にあり、他の装飾要素はその基本構造の補助となっている。この傾向は五領ヶ台Ⅰ式から一部に認められるが、顕著となるのはⅡ式で、特にその後半に入って完成の域に達する。

(2) 勝坂式土器の装飾構造

勝坂式前半の装飾構造を語るにあたって、先に分析を加えた五領ヶ台Ⅱ式からの変化の中でとらえることとする。五領ヶ台Ⅱ式の基本構造は、空間の2分割・主要単位装飾を口頸部に配し、直線的に口頸部につながる胴部の隆線(沈線などの場合もある)の3点に集約されていく。このように、五領ヶ台Ⅱ式の土器装飾における「筋書」と呼べる部分はひじょうに簡単であった。多種類の五領ヶ台Ⅱ式の装飾要素は、それを飾ったり、補助したり、背景などとして発達していた、といえよう。

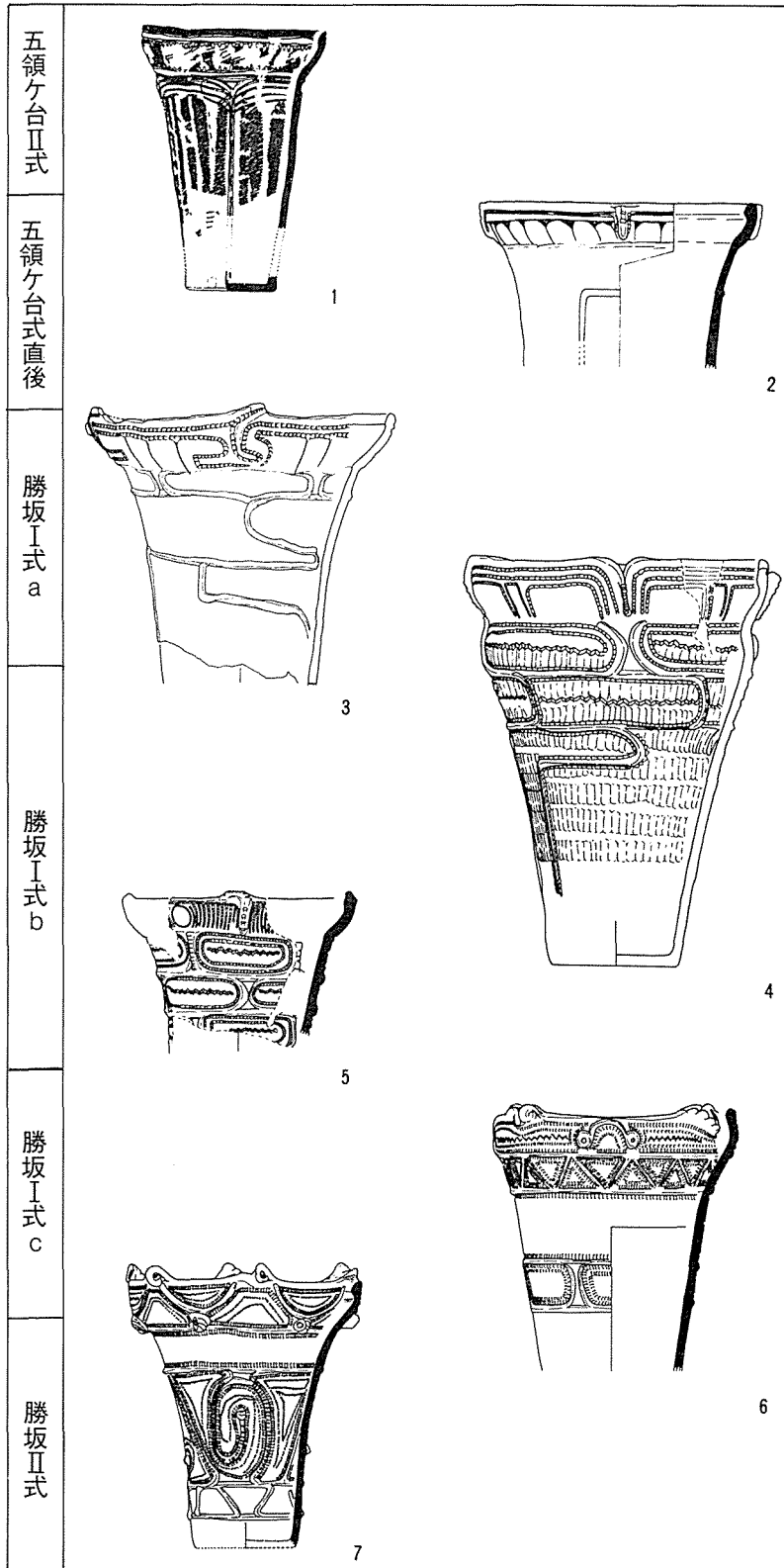
五領ヶ台式直後の段階に至ると、こうした「形容」する部分であった各種の装飾要素が激減する傾向を示し、勝坂Ⅰ式の段階に至ると、そのほとんどが、押引手法の沈線文に集約されてしまう。この「形容」する部分の減少・集約化の要因解明は別の機会にゆずるが、この点は時代を画する重要なポイントである。

五領ヶ台式直後の段階で、重要な点のもう一つは、「形容」する部分の減少・集約化の一方で、「筋書」の部分にあたる、胴部の隆線が屈曲をはじめたことにある。これは、その製作者・使用者たちの心理に、一部の「形容」する部分を変化させるだけでは済まされないほどの動揺が起ったことを示していよう。それまでの「筋書」自体に不安をいだいたためか、それとも積極的に変化を求めたのかは言及しないこととするが、少なくとも、尾ひれの変化では済まされない何かがあったことは確かであろう。

さて、第2図にそって、その「筋書」(構造)の変化について追ってみよう。

胴部で直線的に口頸部を支えていた(あるいはつないでいた)懸垂文は、五領ヶ台式直後の段階で屈曲をはじめた。ここに、胴部装飾の動揺がはじまるのである。

勝坂Ⅰ式a段階では屈曲はさらに強まり、横帯区画文と、屈曲する懸垂文が発達をつづけ、b段階では重畳した横帯区画文が完成する。さらに、b段階からc段階に移る途上、重畳の傾向が過剰になり、横帯区画文と横帯区画文の間に空白部



第2図 胴部文様帯の発展過程 (1 船霊社、2・3 神谷原、他は大石)

分が生じたり、抽象文などが入るようになる。ここに至り、以後の勝坂式の基本的な装飾構造が完成するのである。

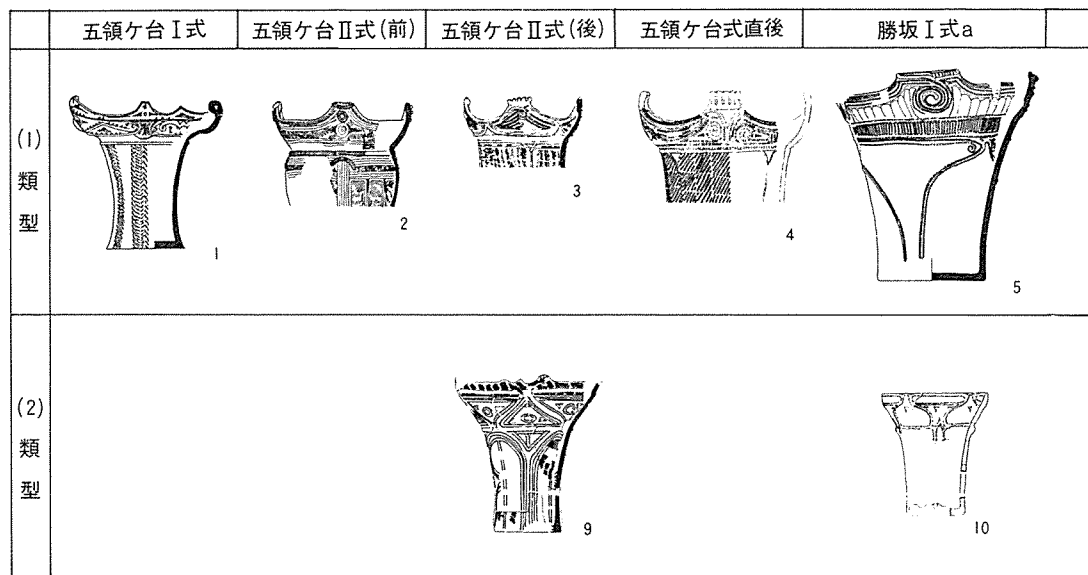
以上、五領ケ台式後半から勝坂式の初期段階の変化を追ってきたが、これをまとめると、

(1) 装飾構造が一変してしまったのではなく、五領ケ台Ⅱ式の脈絡から変化し2分割のうちの、胴部装飾に語らせる部分が増大したことを示している。よって基本的な2分割は踏襲されている。

(2) その変化は「形容」する部分でなく、基本的な「筋書」の変化を示している。

(3) 勝坂Ⅰ式b・c段階では、口頸部から垂下していた隆線が分断され、抽象文・具象文が配置されることで、その装飾構造が口頸部へ繋がる、ということよりも、胴部での展開が重視される方向に変化する。

(4) そして、特徴として区切ること、枠組をつく



第3図 玉抱三叉文の変化(1 籬畑、2・5・7・11 大石、3・9・12 頭殿沢、4 山之台、
註：細分は説明の都合上、五領ヶ台式直後から勝坂Ⅰ式までを特に細

ることを重視する方向に変化している。

こうした変化ののちに完成された勝坂式の裝飾構造は、

- (1) 口頸部と胴部の2分割
- (2) 横方向の重層性の強調
- (3) 胴部裝飾の複雑な展開が相対的に重視される。
- (4) 区切ること、枠組の重視

ということができよう。

2 裝飾構造の変化に伴う個別裝飾の変化

個別裝飾の変化については、これまで量的な変遷や形態の変化に中心が向けられてきており配置についてはあまり重要視されてこなかった。しかし、個別裝飾の配置の変化は単に胴部にあったものが口頸部に移ったという、個々の現象面における問題にとどまらず、土器裝飾全体との関係で捉え直さなければならない。主要な位置を占めていた個別裝飾がなくなることは、土器裝飾全体の構成がくずれ、変化をとげたことにもつながり、「物語性文様」の「物語」の内容自体に変化が生じたことを暗示している、と思われるからである。よって、ここでは、先に見てきた裝飾構造の変化に併行して変わっていった代表的な個別裝飾の事例を見ていくこととする。

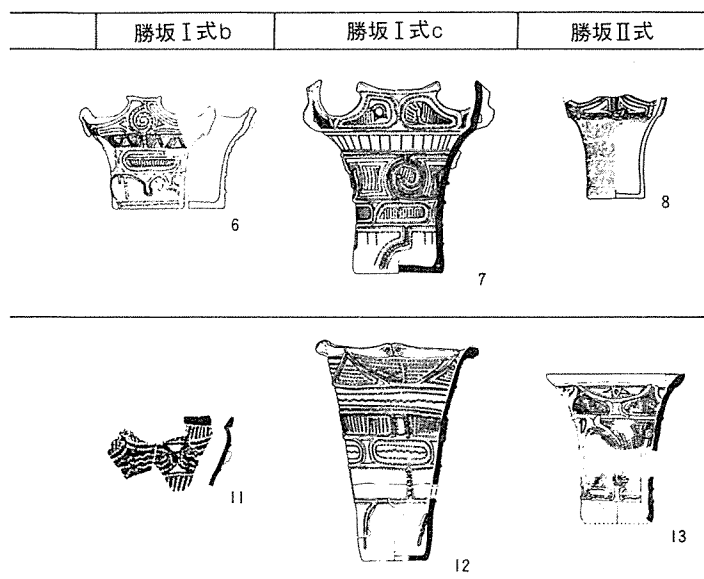
(1) 玉抱三叉文の変化—主裝飾の場合

個別裝飾としての玉抱三叉文、あるいはそれに類似した渦卷文を三叉文で狭む形のは縄文時代の中では非常に息の長い裝飾の一つで、田戸上層式に効果として近いものが現われて以来、施文手法を変え、配置を変えながら流行したり下火になったりして続いてきた。五領ヶ台Ⅱ式は三叉文が比較的多く使われる時期にあたり、玉抱三叉文も口頸部文様帯を中心に認められる。

では、五領ヶ台Ⅱ式の玉抱三叉文の配置を見ていこう(第3図)。

- (1) 山形口縁をもつ土器の山形口縁直下の三角状空間に配置される場合。この場合胴部文様帯のY字状隆線が直線的に、この裝飾に向って伸びてくる配置が多くなっており、玉抱三叉文の主要な位置づけを伺わせている。
- (2) 平口縁土器の場合、口頸部文様帯にあって、横位に連続する弧状沈線裝飾や隆線による半楕円・三角形(重三角)裝飾とともに横位連続する。この場合の胴部Y字状隆線は玉抱三叉文に向う例と三叉文と三叉文の間に向う例が存在する。ここでも、胴部裝飾はひかえめにされており、主要裝飾の位置には玉抱三叉文があてられている。

以上が口頸部文様帯に配置された場合であり、



6・10 神谷原、8 曾利、13 伴ノ木山西）
かくしてある

この外、胴部にあつて用いられる場合があるが、量的には口頸部の場合に比較して少ない。ここでは、主装飾としての変化を追うので先にあげた(1)・(2)について検討を加えることとする。

本題に入る前に、五領ヶ台式から勝坂Ⅱ式の間における三叉文の使用頻度を見て置こう。この時期の代表的な遺跡である大石・神谷原両遺跡のデータを参考にしてもわかるように(第1表)、五領ヶ台式直後には減少傾向になり勝坂Ⅰ式には皆無に近い状態になってしまう。そして勝坂Ⅱ式になると再び復活して用いられるようになる。このように、この時期の玉抱三叉文の配置の変化は、その背後に装飾構造の変化と装飾技法・効果としての三叉文そのものの減少とからみあっていることを念頭に置いておかななくてはならない。

以上の2点とともに(1)の類型についてみていこう(第3図)。これは五領ヶ台式段階ですでに認められるが、主体となるのはⅡ式のしかも新しい段階に入ってからである。さきにも述べたように胴部のY字状の隆線は直線的にこの個別装飾に向っており、配置とともにその象徴的な意味の重要性を示しているものと考えられる。

これが、五領ヶ台式直後の段階になると、その形状に解体がはじまる。山之台遺跡例(池谷1981)は比較的玉抱三叉文の形をとどめているが、ここ

第1表 大石(上)・神谷原(下)遺跡における三叉文の増減

土器型式	三叉文のあり方 対象個体数	三叉文存在
五領ヶ台式Ⅱ式	57	13
五領ヶ台式直後	10	1
勝坂Ⅰ式	60	3
勝坂Ⅱ式	49	18

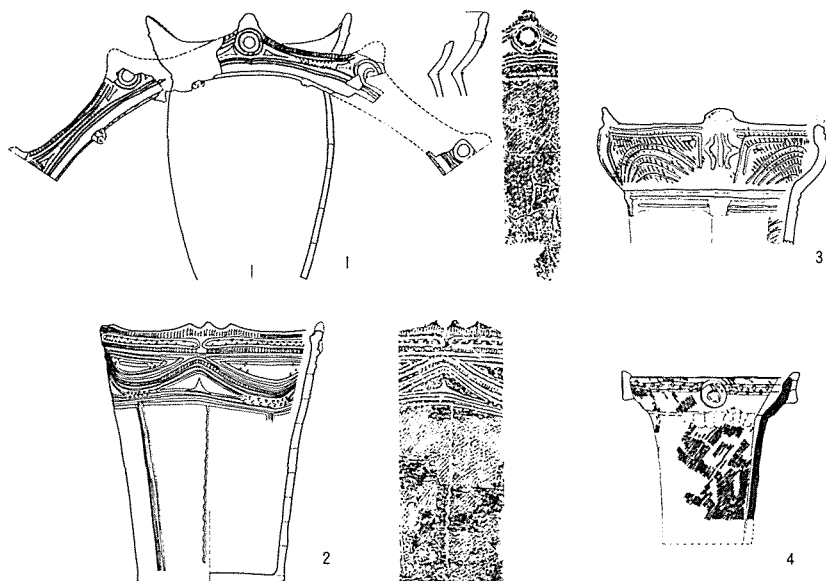
土器型式	三叉文のあり方 対象個体数	三叉文存在
五領ヶ台式Ⅱ式	12	7
五領ヶ台式直後	4	2
勝坂Ⅰ式	59	4
勝坂Ⅱ式	67	38

でも一個の渦巻・三叉文が山形口縁直下に配置されるのではなく、2つに分裂した形になっている(註5)。この外の例、たとえば御伊勢前遺跡(橋口

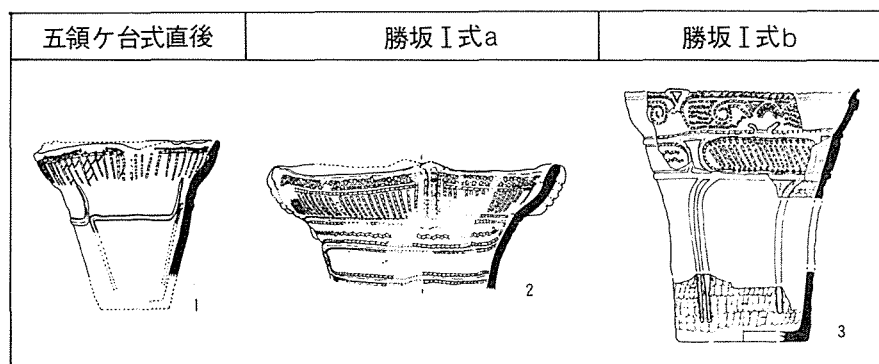
1981)例などは形の崩れの激しさが理解できよう。また、若干器形が異なるが、口頸部の主装飾の位置から口縁部の幅の狭い部分に移動し、さらに口縁部裏面に付く例などが多くなる。ここに五領ヶ台式の装飾構造中では主装飾であった玉抱三叉文がその意味を失いはじめていることがわかる。

勝坂Ⅰ式に至ると、山形口縁の直下に存在するものは皆無に等しくなり、また存在したとしても形が大きく崩れてしまったり、胴部の発達した装飾に比べてかならずしも主装飾の位置を占めているとは言い難い状況になる。ここにおいて、五領ヶ台式の脈絡における玉抱三叉文は消滅に向う。勝坂Ⅱ式の段階で他の装飾とともに復活する玉抱三叉文は、単独では五領ヶ台式の場合に近い象徴的な意味をもっていたとしても、異なった脈絡の中で新たな意味を付加されて登場したものと考えられよう。土器装飾全体のうち主要な位置を占めていたものは、口頸部文様帯の玉抱三叉文などから、胴部の複雑な個別装飾の結合の状態へ移ったのである。

(2) 連続「コ」の字文(鋸歯状文)の変化—補助装飾の場合



第4図 補助装飾としての連続「コ」の字(鋸歯)文
(1 前田耕地、2 武蔵国分寺、3 神谷原、4 船霊社)



第5図 (4) 類型連続「コ」の字文の消滅過程
(1 船霊社、2 伴ノ木山西、3 頭殿沢)

ここで連続「コ」の字文というのは、隆線を交互に刺突したりあるいは2本の沈線の間を交互に刺突して、ひっくりかえったコの子が連続するように見えるもので、鋸歯状文と呼ばれることもある。縄文時代の多くの時期に認められるひとつで、五領ヶ台式にも盛んに用いられる。この装飾も三叉文と同様、五領ヶ台式から勝坂式の時期に移るなかで大きな増減の波を見せている。すなわち、五領ヶ台式Ⅱ式の段階では一般的に使用されていたが、五領ヶ台式直後で減少し、勝坂Ⅰ式には皆無に等しくなり、再び盛んになるのは、勝坂Ⅱ式後半からⅢ式に入ってからである。

では、玉抱三叉文と同様の傾向にある連続「コ」の字文の配置とその変遷について見ていくことと

しよう。まず五領ヶ台式Ⅱ式についてあげる。

口頸部文様帯に存在する場合、以下の類型が認められる(第4図)

- (1) 山形口縁をもつ類型において、主装飾となる玉抱三叉文などを連結する。
- (2) 平縁口縁で、半楕円・三角形区画(重三角区画)内に配置された玉抱三叉文などを連結する。
- (3) 同じく平縁口縁で連弧状沈線の上に配された玉抱三叉文などを連結する。
- (4) 平縁口縁で小突起の付く場合、その突起どうしを連結する。

このように五領ヶ台式Ⅱ式の口頸部文様帯における連続「コ」の字文は、主装飾を連結する補助装

飾としての役割が多く、山形口縁の三角状空間に単独で配置されるようなことは皆無といってよい。

このほか、(5) 口頸部と胴部の境界に用いてそれを強調する場合、(6) 胴部の主装飾である懸垂文を飾る場合がある。これらは、主装飾に近い位置付けとなっているが量的には少ない。

また、胴部文様帯に使用される場合も、重畳する沈線にアクセントを付ける例などが多く補助的な意味合いが濃い。

以上あげた中で、ここでは口頸部文様帯にあって、補助装飾として用いられる場合についてその変遷を追って見る。

まず、(4)の類型であるが(第5図)、量的には五領ヶ台Ⅱ式から五領ヶ台式直後の時期まで一般的に認められる。しかし、次の勝坂Ⅰ式a段階に至ると、激減してしまう。さらに口縁部に配置されていたものが、口縁部端に押しあげられ、勝坂Ⅰ式bの段階ではこれ以外の配置が稀有になり、やがて消滅する。また、(1)などの場合はさらに消滅に向かうのが速く、五領ヶ台式直後の段階にはほとんど見られなくなり、勝坂Ⅰ式a段階にかろうじて残存したものでも、くずれた形の渦巻三叉文に繋がるのではなく、口縁部端に反れていってしまう。

こうした変化は、単に位置が変わったというのではない。装飾構造の変化に伴って意味を失い、重要な配置から脱落していった主装飾と連動し、その補助装飾であった連続「コ」の字文も意味を喪失してしまった結果、一部で痕跡器官として残存するにとどまるようになるのである。

(3) 人面装飾と人体装飾—具象文の変化

個別装飾の中で、端的に象徴的意味をもっていると予測できるのが人面および人体装飾をはじめとする具象文である。ここでは玉抱三叉文や連続「コ」の字文の分析の方法を踏襲し、そのものの意味を直接問うのではなく、配置・形状の変化と装飾構造の変化の関係から、理解することの難しい意味や価値観の変化の「写し」といえる部分を明確にしていきたい。

具象文は五領ヶ台式には存在するものの、本格的に発達を見るのは勝坂式に入ってからである。人面装飾も五領ヶ台Ⅱ式の段階ではひじょうに稀

であり、明瞭な人体が付いた例は皆無である。人面の付く位置は口頸部文様帯であり、人面は器の内側を向くのではなく、玉抱三叉文や円文などの主装飾の付されたのと同様の位置を与えられている。こうした配置は勝坂Ⅰ式b段階まで微量ながら連綿と続いている。

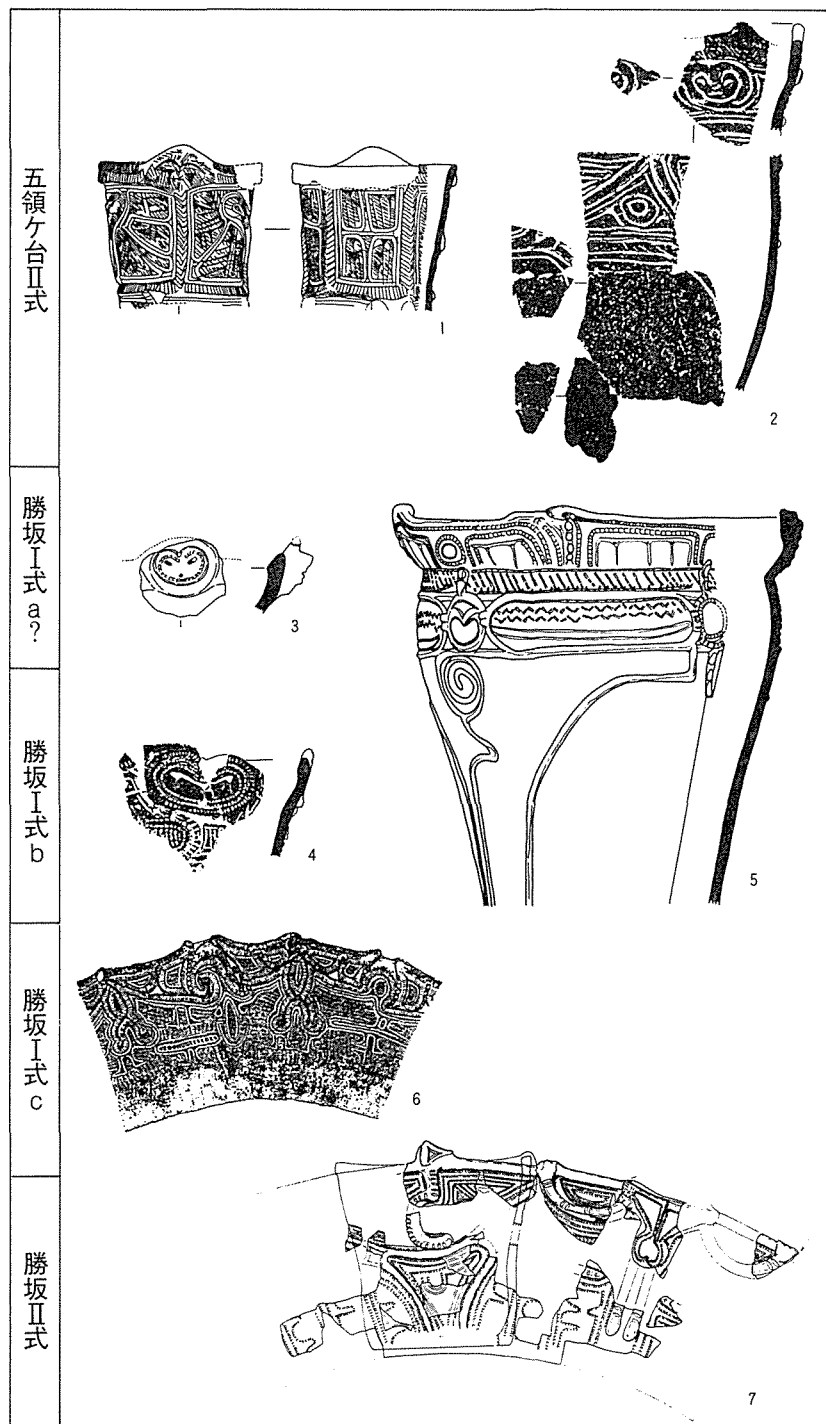
その一方で、この段階には、人面に近い形状を示す円形貼付文が胴部に配置されたり、あるいは人体が付くものが出現する(第6図)。ここには大きな意義を認めざるを得ない。すなわち1つには、口頸部と胴部の2分割において、常に主装飾は視線を集めやすい口頸部に存在していた。それが、胴部に移動する例の出現によって、重要な価値を担っていた記号が、上の領域から、下の領域へ降りてきたことを意味し、五領ヶ台式期の人々と勝坂式期の人々のものの捉え方が大きく変化したことを裏付けていよう。第2には、「ヒト」からモチーフを得るに当たって、顔だけを借りていたのが、身体にも注目しはじめたことにある。人面装飾はその配置からもわかるように、玉抱三叉文・渦巻文・円文などと同等のものを象徴的に表現していたと考えられる。しかし人体装飾は、配置そのものが胴部に降りてくるとともに、それに加えて身体のもつ「具体性」が加味されているのである。この問題はその後隠された価値観の転換を現わした事件として大きな意義があると考えられる。

Ⅲ まとめ

1 まとめ

どの民族に帰属させるか、ではじまった縄文土器の研究は、科学的な分類による枠組の設定を経て、次にはそうした固定的な体系を一旦解体し、時・空間軸中での「動き」とその要因の究明に向かった。そして、こうした土器研究の一潮流に沿って考えれば、現在、ようやく漠然としていた「まとまり」の分析に入り、「まとまり」と「動き」の両者を具体的に示す段階に達しつつある、と捉えられよう。

土器型式群に見る「まとまり」とは、その所属集団に共通の価値観などに根ざした側面が濃厚である。それは、土器のもつ属性のうち、非実用的機能である装飾に見ることができる。それは他集団、あるいは前時代とは異なっているという点で、



第6図 人面・人体装飾の変化

(1・3・4・5 大石、2 船霊社、6 千ヶ瀬、7 木曾中学校)

自集団の価値観などを把握し得ていたものと考えられる。

では実際の作業上、どのような分析方法によってそれらを知り得るかという点については、土器

装飾の統辞法を主眼にしていった。土器から精神的な側面を知るには、その土器と装飾がどのような場面で、どう使われていたか(運用部門)、あるいは直接、土器装飾の象徴的意味を解読する方法(意味部門)などがある。しかし、前者は当時の社会全体をある程度復元しておく必要があること、後者は補足資料の稀少さから推論に終始することを恐れて、今回は除外した。

ここでは、全体をどのように分割していたのか、個々の事物をどう組織化して全体を形成させているのか、どこに主題となる「筋書」を示しているのか、どの部分に視線を集中させるように工夫されているのか、多用される装飾は何か、などといった統辞法から、当時の人々の分類と論理の組み立て方を明らかにし、他の時期や地域との差異から、その精神的な側面の違いに踏み込むデータを提示することに努めた。そのため具体的な題材とし、五領ヶ台式後半から勝坂式初期の時間軸上の

変化の過程を取り上げてみた。

五領ヶ台式後半に多く見られる装飾の基本は(1)口頸部文様帯と胴部文様帯の2分割、(2)口頸部に主装飾を配置、(3)胴部装飾は口頸部の主装飾を

「支え」あるいは主装飾へ「上昇」する直線的な懸垂文に集約され、構造は比較的単純で、口頸部装飾が重要な位置を占めていることがわかる。

これが、勝坂式へ至る過程で、胴部を中心に変化がおこり、勝坂式段階では基本的分割は踏襲されるが、その初期には主体となる領域が胴部に移動し、重層性のある複雑な装飾が配置される。このことにより、直線的な口頸部主装飾へのつながりは価値を失なう。また、区画文の発達など枠組みへの親和性も重要な点である。

個々の装飾も、こうした基本構造の変化と無関係でいることはできない。全体と部分は絶えず密接なつながりをもっているからである。

個別装飾はその脈絡の中で、主装飾と補助装飾があり、それは、配置の傾向によって知ることができる。五領ヶ台式の主装飾であった玉抱三叉文は装飾構造の変化に伴って意味を失ない、使用量の減少、形の崩れ、固定的な配置からの脱落を起こす。補助装飾である連続「コ」の字文も同様の傾向を示す。これらは、その背後で起こっている価値観の変化やそれに一致した象徴的な意味の変化と無関係ではないだろう。そうした精神的な側面を探る上で、統辞部門と意味部門の橋渡しとなる装飾として人面装飾・人体装飾を取り上げておいた。具象文の配置及び形状の変化は、それ自身の象徴的意味だけでなく、それを含めた全体の象徴的意味の変化を示しており興味深い。

以上、第一・二章をまとめて見たが、対象をひじょうに限定してしまったため、論証が貧困となってしまった。今後機会があり次第補足してゆきたい。

2 展望

本稿では多分に土器装飾に現われた精神的な側面を明らかにするための1ステップの傾向を匂わせてきたが、ここではそうした精神的な側面と当時の社会変動との関係について、いくつかの観点を述べて展望としたい。

(1) 社会変動と隣接型式との関係

五領ヶ台式から勝坂式への時期は、多摩・武蔵野地域において遺跡数が増大し、いわゆる定型的な集落が多く形成される時期にあたる。その状況を

を端的に示す例として金程向原遺跡群をはじめいくつかの例をあげて見ていこう。

金程向原遺跡群の調査は東西方向に並列する3つの小丘陵上を対象として行われた(竹石・野中 1982)。そのうち、北側の丘陵斜面に1軒、中央の丘陵の東より基部上に2軒、五領ヶ台式期の住居址が検出された。さらにもっとも南側の丘陵上の広い平坦面には勝坂式期～加曽利E式期の環状集落が形成されていた。至近距離にある各時期の住居址の存在(若干空白期があるためこの各集落、あるいは住居が同一系統の集団である確証はないが)は、五領ヶ台式期の立地と勝坂式期以降の立地の差を明瞭にあらわしているといえよう。勝坂式期以降は集落内の中央広場に広い面積を必要とするようになり、また、この地に継続的に定着している様子が見ええる。

中部山岳地域に比べ、五領ヶ台式期から継続する集落遺跡は少ないが、その中では神谷原遺跡(中西 1979)をあげることができる。神谷原遺跡の場合の近隣の櫛田Ⅳ遺跡(中西 1978)同様、五領ヶ台式期の住居数および形成される群は少なく、勝坂Ⅰ式期以降と比較すると、一集落の規模は小さかったようである。

さらに土井氏は多摩川流域でタイプA集落しか認められない時期として中期初頭をあげている(土井 1985)。また、野川流域の調査においても、勝坂式期に入って、遺跡数が急増し大規模集落が形成されることが指摘されている(広瀬ほか 1985)。

以上、まことにわずかな例しかあげず、集落についての詳細な分析も割愛したが、この地域で、勝坂式期に入って遺跡数が増加し継続性のある集落が次々と形成されていった点だけを把握しておきたい。しかも、その集落および住居構造は中部山岳地域と類似しており、下総台地以東の地域と大きな差を見せるのである(鈴木 1984)。

こうした集落のあり方を変える社会変動の時期に土器装飾の変化の過程を合せて見ると、五領ヶ台式の段階でひじょうに類似した装飾構造をもち、施文技法・効果にも同様の傾向が認められた東・西関東両地域の土器が、その差異をより鮮明にしはじめた時期に一致している。これは、両地域で起った社会変動に即した形で価値観や分類・論理体系の変化が生じ、各々の変化に見合った形の土

器装飾が製作されていたためと考えることができよう。また、自集団周辺で起った社会変動を容認し、変動に付随して起こる秩序の乱れをおさえるためには、隣接する他集団との差異をいっそう明瞭にし集団の「まとまり」を確認する必要があるとも考えられる。勝坂式の初期に見られる、東京湾岸地域の勝坂式と阿玉台式の関係。すなわち、盛んに交流を行いながらも土器装飾の差異を強調して行く過程は、社会変動とその精神的側面を解明する上でひじょうに興味深い問題を提示している。

(2) 集落の増大と土器装飾の変化

中部高地においては、多摩・武蔵野地域に比較して五領ヶ台式期から、勝坂式期へ連綿と継続する拠点的な集落が多く認められる(小林 1973、水野 1973)。しかし、遺跡数の増加の状況は同じ傾向にあり、勝坂式期に増大する。展望の第2点としては、勝坂式土器を主体とする地域で、この時期に起った社会変動がどのような形で土器装飾に反映されたのか、その心理的な側面、あるいは、象徴的意味について触れておくこととする。この時期の社会変動の特徴として手短かに見てきたとおり、人口の増加、一定地域への定着性の進展、領域の確保の強化、をあげることができる。こうした傾向を土器装飾と比較して見ていこう。

まず再度五領ヶ台式から勝坂式への装飾構造などの変化を追ってみよう。

その全体的な特徴は土器装飾を口頸部文様帯と胴部文様帯に2分割した点では類似するが、五領ヶ台式では口頸部文様帯に装飾の比重が傾むくのに対し、勝坂式段階に至ると、装飾の比重が胴部に移行してくる。いま、この上・下の2分割を聖・俗の2分割に沿って推測を重ねることが許されるならば、興味深い内容が浮んでくる。五領ヶ台式の時期、山形口縁を有する類型は、一場面において(中心を山形口縁の頂部とする)、上の領域＝聖界の中央に主装飾である玉抱三叉文を配し、下の領域＝俗界の中央には、上の領域を支える、あるいは上の領域への上昇する直線的な装飾が配置されている。しかも、関心は上の領域に向かっているのである。ところが、その主装飾の脱落が起り、装飾の比重が胴部へ移行することは、五領ヶ台式

後半に確立されていた宇宙観に動揺がおり、より実生活の現実面に重点をおいた装飾構造に改変されていたと考えることができよう。

前章でも述べたごとく、胴部装飾の発達、五領ヶ台式期の懸垂文(五領ヶ台式土器装飾構造の基本の一つ)が変化したもので、装飾構造＝宇宙観が全面的に否定されてしまったのではなく、二分割と上・下領域の関係は受け継がれていると考えられる。宇宙観のうち重視する部分に変化を起こしたと見るべきであろう。

下の領域＝俗界の重視は勝坂式期の人々が、その宇宙観においても現実性を重視する方向に変わったことを意味すると推定したが、この点は具象文の発達からさらに裏づけることができよう。

具象文の表現するものは様々のカミであったり、聖と俗の仲介者であったと推定されるが、五領ヶ台式期の口頸部文様帯の玉抱三叉文、円文、渦巻文、人面装飾などの個別装飾で表現された「聖なるもの」の記号に比べ、それらと俗界との仲介的な役割を重視し、より現実性を重視する傾向が増してきたといえよう。この点が同じ「ヒト」から得たモチーフであっても、人面装飾と人体装飾の隔絶した差異が存在すると考えられる所以である。このことは具象文の配置が胴部文様帯、あるいは口頸部文様帯から胴部文様帯にまたがって配置されている点からもうかがうことができよう。

以上のような、現実面を重視する価値観への移行は、当時の社会変動の方向とまったく無縁であったとは考えられない。また、過剰なほど加飾された複雑な各装飾が一個の土器装飾として統合されている点は、仲介的な役割をはたす装飾を加えて、聖・俗の構造を複雑にしていたこととともに、勝坂式期の人口増加と定着性、領域の確保にともなった社会組織の複雑化とその制御法の難しさをほのめかしているともとれよう。

ひじょうに推測にまかせた議論となってしまったが、土器装飾の統辞法をより詳細に、また今回できなかった定量的な分析をし、他の遺構・遺物などの分析と比較することによって、より具体的に土器装飾に表現された意味や構造を把握し、社会状況との関係を明らかにしていく心要があろう。

さらに、執拗なまでに器面を分割し枠組を設定していく装飾にも、勝坂式期の人々の心理的側面

を見ることができよう。特定の形に親和性を示す心理や枠組みにこだわる心理についても関連諸学の協力を得て解明すべきであろう。

(3) 社会変動と土器装飾の変化のズレ

土器装飾の象徴するものの分析は、大いに興味ある問題である。各々の装飾が何を意味しているか、といった問題とともに、その変化がどのような状況の中で、どの時点で芽ばえてくるのか、どの部分から変化がはじまるのか、を明らかにすることも重要である。それは、モノの変化の細部に大きな社会変動の徴候を読み取ったり、逆に従属していく部分を見出す、といったモノから歴史の流れを捉える考古学の中心課題につながるからである。

前節でも大ざっぱに触れたとおり、勝坂式期に入る段階から、集落などに変化が認められはじめるが、土器装飾の変化で見ると、胴部装飾の動揺がはじまるのは、その直前の時期である。勝坂式期へ変化する地域では、前節の仮定でいう下の領域＝俗界重視、現実性の重視への移行への第一歩が集落遺跡の増大の一段階前ではじまっていることがうかがえる。これを社会変動の徴候と見なすことが可能であろうか？土器製作者の心理は何かものであったろうか。

この点は阿玉台式土器への変化と比較すると興味深い。五領ケ台式期には西関東と類似した装飾内容を示していた東関東の土器は阿玉台式土器への移行に際しても、口頸部文様帯重視の傾向は変らなかった。胴部装飾の隆線による加飾化が本格的に進むのは住居内に炉が持ち込まれ、集落の拡大を見る阿玉台Ⅱ～Ⅲ式になってからである。

今後、両地域の社会変動の比較も含めて、土器装飾の変化との時間的なズレについて考えていき

たい。

3 おわりに

精神的な側面や、それを含めた上での漠然とした「まとまり」への関心は、近年ひじょうに高まってきている。しかし、集団の「まとまり」とは本来つかみどころがないものである。それは、そのあいまいな部分が、解決不可能な矛盾を吸収する装置として、容認されているからである。よって、我々は、客観化できる部分での特定集団の「まとまり」を明らかにするとともに、客観的・論理的に矛盾しながらも、「まとまり」の中にかかえ込まれている部分、及びその存在の仕方を明らかにして行く必要がある。さらに、時・空間軸のからみあう運動状態の中で、「まとまり」の変動を捉え、モノからその徴候などを探る作業を進めていかななくてはならないであろう。

現在もまた「まとまり」の変化の時期にさしかかっているようである。「まとまり」そのものの性質が漠然としたものであるため、個人の判断の許容範囲をはるかに越えた所で好まざる「まとまり」へと巧みに導かれたり、無意識のうちに流されてしまうこともあり得る。我々は絶えずこれらをチェックする方法を模索していかななくてはならないのである。

本稿は1984年度、日本大学に提出した修士論文『勝坂式土器の成立について』の一部分を本題名に即して構成し直し、さらに加筆・訂正を行なったものである。主査の齊藤忠先生をはじめ、西村正衛、蔵持不三也両先生、および長野県埋蔵文化財センター、下総考古学研究会、日本大学大学院有志「歴史の勉強会」の諸氏には様々な御教示を得た。ここに記して感謝の意を表す次第である。

(1986年12月26日稿了)

註1 三上氏は物理的機能と心性的機能に分け、基本的文様単位が、器形と強い関連を示すことを指摘している。さらに、この両機能の関わりから器形・装飾の変化を生産形態の変化との関係から考察を進めている。

註2 例えば、中期後半以降の宗教的な遺物が発達し、また屋内祭祀のシステムが確立していくと、それまで、象徴的な世界を過剰なまでに取り込んでいた土器装飾が簡素化し、そうした象徴的な世界の表現は屋内祭祀や集落祭祀の体系へ移っていく。

註3 構造という語を使用するが、ここでは土器装飾の現象面の構造だけを指して使う。しかし、その背景には各々の時期の意味や宇宙観などを含んでいたと考えられるため、将来そうした側面にも踏み込むことを想定して使用する。

- 註4 五領ヶ台式の細分は基本的なⅠ・Ⅱ式の分離については今村啓爾氏の研究によったが、より細かな細分については系統的な把握に疑問があるため、山口氏の分析を加味して、大きく前半、後半という書き方をした。また、本稿でいう五領ヶ台式は「型式群」として広義に使用している。よって、大石式や神谷原式という小型式の名称は用いず、五領ヶ台式直後とした。しかし、その内容は佐藤達夫氏とは異なっている。この点については後日、詳細に述べる機会を取りたい。また、この段階は、将来的には、「型式群」としての五領ヶ台式に包括すべきであると考えている。
- 註5 山形口縁の直下に「Y」字状隆線が入り玉抱三叉文を二分する手法は東北方面にもあり、この点も考慮して置く必要はあろう。

引用参考文献

- ア 安孫子 昭 二 1969 「縄文中期前半の土器」『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅶ
- イ 池谷 信之ほか 1981 「泰野市山之台遺跡出土の土器と石器」『小田原考古学会会報』10
- 今村 啓 爾 1972 「宮の原貝塚」
- 1985 「五領ヶ台式土器の編年」『考古学研究室研究紀要』4
- ウ 上 野 佳 也 1980 「情報の流れとしての縄文土器型式の伝播」『民族学研究』44 - 4
- エ 江 上 波 夫 1963 「勝坂式系土器の動物意匠について」『国華』855
- オ 青梅市郷土博物館 1981 「千ヶ瀬遺跡と多摩の縄文」
- オ 岡崎 完樹ほか 1985 「出土土器について」『利島村大石山遺跡範囲確認調査報告書』Ⅲ
- 1985 「武蔵国分寺跡発掘調査報告書」
- 岡 本 勇 1965 「縄文文化の発展と地域性一関東一」『日本の考古学』Ⅱ
- 1966 「尖底土器の終焉」『物質文化』8
- 1968 「縄文時代の時期区分について」『歴史研究』98
- 1969 「「五領ヶ台上層式」土器についての覚え書」『貝塚』3
- 岡 本 勇 ほか 1970 「平塚市広川五領ヶ台貝塚調査報告」
- 岡 本 勇 1975 「原始社会の生産と呪術」『岩波講座 日本歴史』1
- カ 川口 正幸ほか 1983 「町田市木曽中学校遺跡」
- コ 甲 野 勇 1935 「縄文式石器時代文化の変遷」『史前学雑誌』7 - 3
- 小 林 達 雄 1966 「縄文早期に関する諸問題」『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅱ
- 1973 「ハヶ岳西南麓の遺跡群とセトルメントシステム」『広域遺跡保存対策調査研究報告』3
- 1977 「型式・様式・形式」『日本原始美術大系』1
- 1979 「縄文土器」『日本の原始美術』1
- 1981 「越後新潟火炎土器のクニ」『月刊文化財』215
- シ 下総考古学会 1986 「勝坂式土器の研究」『下総考古学』8
- ス 鈴木 敏 昭 1983 「縄文土器の施文構造に関する一考察」『信濃』35 - 4
- 鈴木 保 彦 1981 「勝坂式土器」『縄文土器大成』2
- 鈴木 美 治 1984 「阿玉台期における竪穴住居跡の形態についての一考察」『年報』（茨城県教育財団）3
- タ 竹石健二・野中和夫 1982 「川崎市麻生区金程向原遺跡群の調査」『第6回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 谷 井 彪 1977 「勝坂式土器の文様構造について」『埼玉考古』16
- 1977 「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察(前)・(後)」『信濃』29 - 4・6
- 1979 「縄文土器の単位とその意味」『古代文化』31 - 2・3
- ツ 塚 田 光 1964 「群馬県新巻遺跡の中期縄文土器」『下総考古学』1
- テ 寺 内 隆 夫 1984 「角押文を多用する土器群について」『下総考古学』7
- ト 土 井 義 夫 1985 「縄文時代集落論の原則的問題」『東京考古』3
- 戸 田 哲 也 1971 a 「町田市玉川学園清水台遺跡緊急発掘調査略報」『文化財の保護』3
- 1971 b 「勝坂式土器編年に関する試論」『小田原考古学会会報』4
- ナ 中 島 庄 一 1985 「縄文土器文様の研究」『東京考古』3
- 中 西 充 1979 「縄文時代中期初頭の諸問題」『們田遺跡群 1978年度調査概報』
- 1982 「縄文時代中期の出土土器について」『神谷原』Ⅱ
- ニ 西 村 正 衛 1984 「石器時代における利根川下流域の研究」

- ハ 橋口定志ほか 1979 『前田耕地』Ⅱ
- 橋口尚武ほか 1981 『御伊勢前』
- 伴 信夫ほか 1976 「大石遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その3』
- ヒ 樋口昇一ほか 1980 「船霊社遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—岡谷市 その4』
- 1981 「判ノ木山遺跡」「頭殿沢遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その4・富士見町その3』
- 広瀬昭弘ほか 1985 「縄文時代集落の研究—野川流域の中期を中心として—」『東京考古』3
- フ 藤森栄一ほか 1965 『井戸尻』
- ホ 掘越正行 1971 「土器型式の事象と論理—その相対的側面—」『史館』1
- ミ 三上徹也 1986 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51
- 水野正好 1973 「縄文時代集落の領域構造をめぐって—八ヶ岳西南麓遺跡の理解のために—」『広域遺跡保存対策調査研究報告』3
- ム 武藤雄六 1968 「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」『考古学集刊』4—1
- 1975.76 「中期縄文式土器の文様解説」『山麓考古』2.3.4
- 1978 「縄文時代中期農耕文化私論」『山麓考古』9
- 武藤雄六ほか 1978 『曾利』
- ヤ 八幡一郎 1938 「縄紋式文化」『日本文化史大系』
- 山口明 1980 「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」『静岡県考古学会シンポジウム』4
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1—1
- 1940 「勝坂式」『日本先史土器図譜』